

身籠り婚したい殿下の
執愛に囚われそうです



やの有麻

Arima
Yano

目次

身籠り婚したい殿下の執愛に囚われそうです

5

書き下ろし番外編

ラースのとある日

341

身籠り婚したい殿下の執愛に囚われそうです

プロローグ

——人々が寝静まり静寂に包まれる真夜中、とある一室にはまだ眠りについていない二人がいた。

ベッドが軋むギンギシという音に、ハア、ハアという荒い息遣い、肌と肌がぶつかる音が重なり、響き渡っている。

たまに女性の甲高い悲鳴が交じり、そして粘着質なパチュン、パチュンという、なんとも表現し難い卑猥な音が聞こえてくる——

私は今、男性に組み敷かれ、身体のナカを男性のもので貫かれている。意識が朦朧とする中、肌を打たれる速度は加速していく。

シーツを掴む手に、力がこもる。

「ハ、ア……出す、ぞ……っ、くっ！」

「や、め——っ！ ひ、ああア——」

私の中に容赦なく打ち込まれる熱杭から、熱いものがお腹の中に注がれる……もう何度注がれたか分からないほどに、この行為は何時間も続いている。

うつ伏せで腰だけ高く起こされ、腕に力が入らず、逞しい腕にがちりとホールドさされている状態で、私の上に覆い被さっている人と互いに荒い息を吐いている……

なにこの展開。計画がまるで違う。

どうしてこんなことになってしまったのか。

それははるか昔、私の前世まで遡ることになる——

第一章

しがないOLの私は、職場から電車を三つ乗り継ぎ帰宅中。電車を降りると、ザーザーと音を立てて大雨が降っていた。

私は親から独立して、都会のほうにアパートを借り、住んでいる。

交通の便は田舎に比べ断然良いのだが、コンクリートに覆われた地面は雨水の逃げ道がなく、雨が降る日には、帰り道はすぐに冠水してしまう。

そして今、まさに「大雨で道路が冠水して通行止めになっている」というアナウンスが流れたので、私は仕方なく遠回りして帰宅することにした。

電車の中で読んでいた小説を閉じ、少しでも濡れないようタオルでスマホを包む。幸い風はそんなに強くなかったので、梅雨時の必須アイテム・折りたたみ傘をさして帰路につく。

……この時、雨がやみ通行止めが解除されるまでカフェなどで時間を潰せば良かった、と後悔する羽目になるとは思ってもよらなかった。

よく、大雨にもかかわらず、粹がって車を飛ばす人がある。この川沿いの道は、信号のない一直線の道が続くため、規制速度四十キロを守らず速度オーバーして飛ばす車が多いところだった。

今日の私はつくづくついてなかったようだ。視界の悪い中、車のライトに照らされ目が眩み気付いた時には、ダンプカーが目の前にあった。

私の最後の記憶は、全身に強い衝撃を受け、飛びそうになる意識の中、深い水の中に沈んでいくところまでだった……

気づいたら、病院でもなく日本でもなく、地球ですらない異世界にいました。正確には転生していました。

しかもこの世界は、私が愛読していたWebで人気の短編小説『お転婆令嬢のシンデレラストーリー』の中だったのだ。

何故それに気づいたのか？

何故なら私が、その小説の悪役だったからだ。

ミヤルカーナ・ドルドムガン。転生した今の私の名前。

三大公爵の一つ、ドルドムガン公爵家の長女として生まれ、このラハーム王国の第一王子、ガブリエル・ラハーム・マリウルの婚約者となる。

兄と妹がいるが不仲。両親は仲睦まじいが、兄は跡継ぎとしてさまざまな学問を厳しく学ばされた。ミヤルカーナも令嬢として厳しく育てられたが、末の妹は自由に育てられた。ミヤルカーナはそれが気に入らず、妹を苛めていた。同居している他人のような両親と兄はそれに関心を払わず、妹は苛められ続け、気の弱い娘に育った。

ミヤルカーナは親の愛に飢え、ワガママを言い、従者や侍女たちを困らせていた。食事に嫌いなものが出れば一切口をつけず新しい料理を作らせる。

気に入らない侍女がいれば苛める。

欲しいものがあれば手段を選ばず手に入れる。

口癖は「私は公爵令嬢なのよ。逆らったらどうなるか、お分かりで？」だったかな？ 身分は確かに高いが、ミヤルカーナはただの公爵令嬢であって公爵の権力なんて持っていないし、呆れて物が言えないほどのお馬鹿さんと思えない。

この国の貴族は、十四歳になると、国の決まりで学園に通うことを義務づけられている。ミヤルカーナは、そこで一つ年上のガブリエル殿下と出会い、恋をする。

光の反射によって青みがかって見える黒色の髪。王家の証とされる金色の瞳。そして凛々しいが少し冷めた感じの顔。ガブリエル・ラハーム・マリウルス。そう、この国の唯一の王太子。

世継ぎとして幼い頃からさまざまな教育を施し厳しく育てられ、その結果感情が抜けた王の操り人形のような王太子が創り上げられた。周りからは『美水のマリオネット』と呼ばれている人物だ。

ミヤルカーナは父親の権力に物を言わせ、婚約者の座を射止めた。

ガブリエル殿下は国王陛下の決めたことに異議を唱えたりはしない、父親に忠実な人物だった。だからミヤルカーナとの婚約にも何も言わなかった。

ミヤルカーナはそれを好意として受け取り、傲慢さに拍車がかかり「私は次期王妃になるのよ！」と威張り散らしていた。

そんなある日、ヒロインの男爵令嬢が現れる。

ヒロインの名前はジャミン・クラー。平民で、母親と二人でひっそり暮らしていたのだが、母親が病氣にかかり他界。天涯孤独になったジャミンは幸運にも領主であるクラー男爵の目に留まり、養子として迎えられた。それが十四歳の頃。

ガブリエル殿下は、十七歳になり学園に通い始めたヒロインに夢中になる。もちろん、それをミヤルカーナは気に入らず、ヒロインを苛め倒す。

ガブリエル殿下がヒロインを庇い、ミヤルカーナは激情し、苛めが悪質なものとなっていく。最終的にヒロインを毒殺しようと企み失敗に終わるが、それを乗り越えたガブリエル殿下とヒロインの絆はさらに固く結ばれていった。

ミヤルカーナの悪事も、ついに終わりを告げる時がきた。

それは年末に行われる夜会のできごとだった。

この夜会には高等部の、伯爵以上の高位貴族子女が集まっている。

突如、「バーン！」と大きな音を立てて出入り口の扉が開き、ジャミンを先頭に身分の低い令嬢数人と騎士一団が入ってきた。

皆何事かと注目したが、ジャミンは堂々と胸を張って歩き、ミヤルカーナの目の前まで来て、意思の強い眼差しで睨みつける。

「ミヤルカーナ・ドルドムガン様！ これまでの悪事をこの場で告発し断罪させていただきます！」

ジャミンの一言で周りがざわつく。ミヤルカーナは右手を軽く挙げ、それを静める。

扇で口元を隠し、目を細めてジャミンを見つめる。

ジャミンは静かになった会場で、ミヤルカーナが今までやってきたことを詳細に話し始めた。

いつ何時、何をした、と苛めの内容をすらすらと語っていく。ミヤルカーナは、それを静かに見つめていた。

「……以上のことを、あなたはしてきました。……よって、今この場で断罪させていただきます」

「私を断罪？ どうやっ——」

「クラー嬢。その件については私が引き継ぐ」

「!? ガ、ガブリエル様……」

一枚の上質な紙を掲げたガブリエル殿下が、ジャミンとミヤルカーナの前に現れた。

「これは私とドルドムガン嬢との婚約証だ。これは本日をもって破棄とする」

「あ……」

殿下はそれを大きな音を立てて真つ二つにし、破り捨てる。婚約証は役目を果たさなくなった。

ミヤルカーナからは先程までの怒りの表情が消え、放心状態で立ち尽くしている。そ

れをガブリエル殿下は目を細め、ただただ見ていた。

「ミヤルカーナ・ドルドムガン公爵令嬢。そなたの罪を告発する声が数多寄せられている。さらにそなたには、貴族令嬢を毒殺しようとした罪がある。そなたの行いは、王妃として相応しくない。よって、身分剥奪のうえ国外追放に処す。幸い妃教育はあまり受けていないと報告が上がっているの、情報流出はしないと判断されての国外追放だ。直ちにこの国から出てゆくが良い」

「そ、そんな……！」

無慈悲にガブリエル殿下がそう言い放つと、ミヤルカーナは正氣に戻ったのか、追いつめるようにガブリエル殿下のほうへと歩みだす。

しかし、そこへジャミンが連れてきた騎士団が数人殿下を守るように立ち、そしてもう数人がミヤルカーナの腕を引き、身動きがとれないよう拘束した。

ミヤルカーナは悲鳴も上げず、ただただ涙を流し、ガブリエル殿下のみを視野に収め懇願するように「ガブリエル様……ガブリエル様……」とうわごとのように呟いている。「連れていけ！」

鋭いガブリエル殿下の声が響き渡り、騎士たちはそれに従いミヤルカーナを会場の外へと連行していった……

こうして悪役ミヤルカーナは断罪され、ヒロインは王太子であるガブリエルに結婚を申し込まれ、後には王妃となりハッピーエンドで終わり。

断罪後のミヤルカーナの行方はいくつかある番外編の一つで書かれていたみたいだが、私は読む前に人生の幕を閉じてしまったので分からずじまいだ。

とても気になるが確か番外編は十八禁の内容だったような……？ え、まさか闇落ちだったのかな？ 奴隷落ちとかあり得る。娼婦とか？

いやいや、分からないことを今考えても仕方ないわ。悪役は悪役のまま記憶にととくべきね。その先なんて知らなくて良いわ。知らぬが仏という言葉もあるわけだし。

転生した私の末路も平民落ちで、トゥルーエンドで綺麗に終わるってことにしよう。うん。

問題はその前よ。私は物語通りにいくと、近々ガブリエル殿下の婚約者となる。

貴族に生まれたからには政略結婚は免れない。前世では結婚したことはないが、理想はある。

まず、結婚は互いに想い合っているのが前提ね。恋愛結婚が理想的で、もちろん、子供

も欲しい。そして一からすべて私の手で育てたい。母乳が出れば母乳で育てたい。そして専業主婦で、三歳の頃から幼稚園に預けるのが理想。

異世界では、貴族の男は政務ばかりして、女は他の令嬢たちとの交流。そして子は乳母に預けられ、母乳で育てるなんて夢のまた夢だ。

それに無表情でお人形のような殿下と結婚しても、きつと仲睦まじい平凡な家庭は築けないだろう。

夢を叶える前に命を落としてしまったけど、幸せな家庭を築きたいという夢は、転生したからと言って、はいそうですかと簡単に捨てられるものではない。

王太子との婚約フラグをへし折りましょう！　そして破滅回避ね。よし、これでいこう。

シナリオができあがっている物語が、時に「強制力」を発揮するというのは必然なのだろうか。

それは本人の意思にかかわらず、物語をハッピーエンドへと導くために働いてしまうことを、私は、この時点では思いもよらなかった……

△△△△△△△△

そして私は今、フカフカの染み一つない真っ白なベッドで目を覚ました。

重たい身体を起こすと、ノックの音が聞こえ、返事をする前に侍女のジェミーが入ってきた。そして私の姿を確認すると、慌てて駆け寄ってきて抱きしめられ、何故か号泣しながら謝られた。

なんでも、庭園をジェミーと一緒に散策していて、私から目を離れたとたん、バシヤンと大きな水音が鳴り、音のしたほうを見ると、私が仰向けで池に浮かんでいたらしい。慌てて人を呼んで救出し、医者と呼んだり公爵（私の父親）に報告したり、大騒動になったという。

その時、私にさっきの前世の記憶が蘇ったのだ。

それから私は熱を出し（多分記憶が戻り体に負担がかかったから）、一週間眠っていたらしい。その間ジェミーが四六時中私の世話をしてくれたみたい。

……私に抱きついてきたジェミーは目に真っ黒いクマを作っていて、やつれているように見えた。物凄く心配してくれていたみたい。

そもそも何故池に落ちたんだろう？　運動神経悪いのかしら？

「わ、わたしが、悪い、の、ですっ！　も、もう、しわけ、ごさいま、せん、おじょー

さまー!!」

「もう大丈夫よジェミー? こんなにやつれてしまって……もう、ジェミーは心配性なんだから」

「お、お嬢様あー!!」

確かジェミーって、六歳の私より十歳上の十六歳だったよね? 心配してくれたのは分かったけど、なんとも……行動が幼いし、侍女として大丈夫なのかと思えるほど大雑把な子なのよね……

それから父親をはじめ、私の部屋に人が押し寄せてきた。お母様は泣きながら抱きしめてくれて、心がほんわか温かくなった気がした。

心配をかけたことを謝罪したら、何故か皆に驚愕された。え、何故?

そうね、多分……六歳の今もワガママし放題だったんだろうな。だから謝罪したら驚かれたのね。

でも……あれ? 小説に『幼い頃ミヤルカーナは池に落ちた』なんて設定があったかしら。

さらに今現在、ここには家族全員揃っている。あの子供に無関心な両親が、あの何事にも興味なさそうなノアルーアお兄様が、あの苛められて私を嫌っているはずの妹カタ

リアーナが……何故かここに集まっている。

……え、どうなってるの? まあでも私が無事と分かると、すぐ解散していったけど。今はジェミーと私の二人きりになり、ジェミーは私のために水を用意している。

ちょうどいいわ、私の知ってる小説の内容と答え合わせするよう、少し探ってみましょう。

「ねえジェミー、聞きたいことがあるんだけど」

ジェミーに声をかけると、彼女は持っていた水差しを机に置き、ベッドの傍まで寄ってきた。

「はい、どうしましたかお嬢様?」

「……両親は、兄妹は、何故私が目覚めただけで駆けつけてきたの?」

両親と兄は無関心、妹には嫌われていたと書かれていたのに……

小説の通りならこの程度のことと駆けつけてくるはずがないのだ。

なんだろう? 世間体を気にしているのかしら? それとも単に興味……いや、それはない。でもうちの爵位からして周りの目を気にする必要はないと思うのだけれども……

私は疑問でならなかった。

難しい顔をして考え込んでいると、ジェミーは何故かドヤツとした顔をして、自慢するかの様に胸を張ってにっこりと笑った。

「それはもちろん！ お嬢様の安否が気になったからでしょう。きっと旦那様なんて今頃部屋で安心して涙を流しておられますわ！」

「……は？」

予想外の言葉を聞いて呆気にとられてしまった。え、ジェミーが言ってる旦那様って私の父親のことよね？ な、涙を……なんですって？

「ノアルルーア坊っちゃんもきつと今頃泣いておられますわ。それにカタリアーナお嬢様も——」

「ま、待ってジェミー！ ……え、何故ですか？」

「？ どうかいたしましたかお嬢様？」

話を遮った私を、ジェミーはキョトンとした顔をして見てくる。

今、この子はなんて言った？ お父様が、お兄様が、妹が涙流してるって言った？ ちよつと待って頭が混乱する。え、何故……？

思わず「小説と内容が全然変わってるじゃないのよー！」と絶叫しなくなった。

両親が仲睦まじいのは変わらない。子供たちに厳しい教育を施しているのも変わらない

い。だが私の知る「普通の家族」そのもののように皆、仲良しだった。

ミヤルカーナとしての六歳までの記憶でも、確かに私はワガママの癪癪かたしこ持ちだし、兄は何事にも無関心だし、妹は気弱だ。だがギクシャクすることはなく、普通に食事は家族ととるし、外出も一緒だったりもする。人物設定は小説の通りだった。ただ家族仲が変わっていた。一体何故だろう……

頭の上を疑問符が駆け巡っていると、ジェミーが微笑ましそうな顔をして意味の分からないことを言い出してきた。

「ふふ、お嬢様は自分の価値をご存知ないのですね」

「何を言い出すのよジェミー……」

「お嬢様はご家族から深く愛されているではないですか。周りの貴族の方々は皆羨ましがっていらつしやるんですよ？」

「は？」

なんかとんでもない発言がでてきたんですけど。……この、ワガママ娘が家族から深く愛されて……んんっ！

さらにジェミーがまた胸を張ってドヤツとした顔をして、誰かの真似をし始めた。

「『高位貴族でこんな仲良しそうな家族を見たことがない。皆が集まる場では公爵家と

して威厳を保つためのものか、一見よそよしく冷えきっているように見えるが、人目がないところでは仲良さそうに笑い合っているのだ。世間体なぞ気になさらなくても良いのに、なんとももったいない』と言われているの、ご存知ありませんか？」

「……………」

開いた口が塞がらないというのはまさにこのことだろう。呆れたわけではないが、予想の遙か斜め上のことを言われて、驚いて体と思考がフリーズしてしまったのだ。一体我が家で何があったのだろうか……

ジュミーの話によると、上位貴族であり国の権力でもある三大公爵の一つである我が家は、確かに品位を保つために常に冷静沈着に振る舞っている。だが社交場から離れば親は子を可愛がっているようだ。他愛ない話をして、頭を撫でたり肩を叩いたりスキップをとっているというのだ。

……ミヤルカーナの六年間の記憶を思い出すと、ああ、確かにそういう記憶がある。それにミヤルカーナは言っていることはワガママだが、傍からみれば甘えているようにも見える行動ばかりとっているなってしまう。

「それに、ミヤルカーナお嬢様はワガママをおっしゃるふりをして、領民たちを助けてくれる、まるで淑女の鑑かがみのようなお方だと評判なんですよ」

「は!？」

確かに、こっそり我が領地のある街に庶民の服を着てお忍びで行き、店を見回っては、「まあ汚い! この店はちゃんと掃除をしているの? これでは味が一流でも食べる気が失せますわ! 店員は一体何をしているの? 間抜けな人しかないの? 店が潰れるわよ!」

といちゃもんつけつつ改善点を示して出ていき、後にお父様に今日はこんなことがあったと愚痴を言ってお決まりの「なんとかして! パパならできるでしょ!」で困らせていた。その後、お父様は我が家の自慢の侍女を二三人派遣して人材育成したりしていたような記憶が……

まだある。またこっそりと屋敷から出て街へ行き、

「何よこれ! この店は腐ったものを売っているの? ほったくりにも程がありますわ! パパに訴えますわ!」

と言って業者はどこだとかギャーギャー騒いで事を大きくして、その結果、悪徳業者を捕まえたこともある。あとは、

「まあまあ臭いこと! あそこの孤児院の子供はまともな生活ができていないのではないかしら? パパがちゃんと孤児院を支援していると聞いているのに! パパが嘘ついているの

かしら。それともシスター？　あなた、横領とかしてませんわよねえ？」

と怒鳴りこんで横領シスターを晒し、孤児院の改善を促したり……

行くところ行くところにダメ出して嵐のように去っていくのだ。……そしてその後すべてお父様に言いつけ、お父様が私の言っていることの真偽を調べ、支援したり改善させたりしていたみたい。

確かに言っていることはワガママ、というか傲慢そのもの。従者や侍女に迷惑をかけてるのも小説通り。

でも、なんというか……善良な悪者？　悪者のフリをして、実は良いことをしているようにしか捉えられない行動ばかりとっている。

こ、これが小説に書かれていたことの真相なのだろうか？　うーん……

「お嬢様の行動によつて旦那様は、領民たちの厚い信頼を得ているのですよ。だから旦那様はお嬢様のお話を聞き、何も言わずすぐに行動しておられるのですよ！」

「そ、そうなの。へえ……（それで良いのか父よっ！）」

「ええ！　お陰で移住する領民が増え、税を多少軽くしても赤字にならないほど栄え、今では王室に次ぐ財産を持っているのですよ！　それでいて旦那様は権力を振りかざすこともなさらないので、陛下の信望も厚いんですよ！」

こ、これはまさに小説には書かれていない事実。まあたかが短編小説、そんな細かい設定なんてされてないのだから……なんか私の知ってる小説の内容と誤差が生じて戸惑うばかりなんですが。

あ、もしかして私という異端者がもたらした誤作動なのかしら。乙女ゲームで言うところのバグのようなものなのかしら？

前世の記憶が戻っても、私は変わらずワガママを突き通していた。

やめれば良いのに、ミヤルカーナの性分が今の私の性分に勝っているのか、天邪鬼あまのじやぐのように勝手に動いてしまうのだ。

私だったら怒りを覚えるような言葉を、平気でポロッと口にする。

「ジェミー喉が渴いたわ」

「はいお嬢様！」

「はあ、腕が痛いわ。ジェミー腕を揉んで」

「はいお嬢様！」

「甘い果物が食べたいわ。用意して」

「はいお嬢様！」

なんてワガママ言っているのでしょうか。頭の中では自分を罵倒しているけれど……い

かんせん勝手に言葉が出てしまうのだ。

私の良心がチクチクとダメージを受けてるんですけど。

そして何故かジェミーは喜んで従っている始末。

え、ジェミーMなの!? 今度鞭でひっぱたいてあげようか? (もちろん冗談よ!)

少しジェミーが心配になり直接聞いてみた。

「ジェミー……あなた、苦にならないの?」

「え、何がですか?」

「私のワガママに従って……苦にならないの?」

「なりませんよ? むしろずっとお嬢様の傍にいられて、私を頼っていただけて嬉しいですよ! それにお嬢様の命令は全然嫌じゃありませんよ!」

まあ! 真性Mっ娘予備軍的な発言もらいましたよ。私みたいなのに忠誠なんて誓って大丈夫なのかしらこの子? なんか将来を心配しちゃうわ……

こんな感じで、好き勝手やりながら毎日が過ぎていった。

お兄様もお父様も、私のワガママを無表情で受け入れ即行動に移し、お母様は微笑んで聞いてくれる。

妹も、私が構ってくれているということが嬉しいみたいで素直に従ってくれた。

……何故か皆、快く受け入れてくれる。私、こんなにもワガママ言ってるんだよ? なんて普通に言うこと聞いちゃうの? まさか皆Mなんですか? ……いや、私がおかしいのか? ここの常識が分からない。

このままいけば傲慢な悪役令嬢ボジにはなりそうだけど、殿下との婚約については、お父様に断固拒否の態度を示していればよさそうだし、もはややりたい放題イージーモードライフを満喫できるんじゃないかとすら思えてきた。

△▽△▽△▽△▽

……それでも、いよいよ現実を突きつけられる時がやってきた。

月日が流れ十四歳になった私は、落ち着かない毎日を過ごしていた。

小説では季節などはほんのり匂わす程度に書かれるだけだった。だから今も、私の未来の婚約者である王太子殿下と出合い、婚約するイベントがいつ起きるのがまったく分からずヒヤヒヤしていた。いや、婚約のきっかけは私のワガママなんだけどね……

ば、未来を知っていてもどうすることもできない状態なのだ。ただ成り行きに任せて生きてるだけ。ただ、それだけなのだ。

国の方針で、十四歳になる貴族子息、息女は学園へ入学することになっている。
……その学園へ通う一ヶ月前、ついにあのイベントが発生した。

「え？ 第一王子のお披露目会？」

「はいお嬢様。その招待状が届いております」

「っ……………」

言葉にならない声が出た。

そう、私になって毎日落ち着かない生活をしていた原因だ。

王太子殿下が十五歳になり、来年学園の高等部に上がる。その前に婚約者を決める。

王太子殿下は、学園卒業とともに本格的に公務に取りかかるようになる。そして婚約者となる令嬢は殿下の支えとなるよう教育が必要だ。

そのために開かれるのが「お披露目会」だ。

お披露目会に出席する令嬢は、婚約者のいない高位貴族の十二〜十六歳の令嬢のみ。

殿下と交流を持ち、その様子を見て、国王陛下が次期王妃に相応しい人物を見極めて婚約者を決める。

……という、なんとも適当なイベントが発生するのだ。

まあ高位貴族は政略結婚なんて普通だし、殿下は……まあ小説と変わっていないければ、愛情を知らず育った無表情、無感情な人物のはず。

「面倒」とか「嫌悪」とか、そういう感情を抱かないまま、ただただ陛下の言うとおりに決められたことをして日々をやり過ごす生ける屍のような人。

だからこそ、このイベントも適当なのだろう。だって、殿下ではなく陛下が殿下の婚約者を決めるのだからね。

うん、第三者から見れば「殿下、可哀想！」的な感じに思えるんだけど、本人が何も行動を起こさないのであれば、他人が何言っても無駄だろう。

……てなわけで、公爵家の長女として生まれた私には拒否権もなく強制参加です。まあ参加しなきゃ、多分話が進まないよね。あー行きたくないわ。

……あ、良いこと思いついたわ！

「……ダメだ。王命だからな。立ち上がれないほどの病気にでもならない限りは欠席で

きん」

はい、仮病使って休みたかったけど無理でした。小説の物語と違ってかなり家族仲が良好になってるから、「もしかしたらお父様なら！」という期待を込めて、心底困った顔を浮かべて「前日に体調崩したことにして欠席させて！」と申し出ただけ……無理でした。

少し苦悩した様子があったから、お父様には娘の要望を叶えてやりたいという気持ちもあったのだと思う。

けどさすがに王家直々の招待を蹴るわけにはいかない。今回はいくら可愛い娘のワガママでも聞いてやることはできなかったらしい。

お父様……無表情ながら少し眉が下がったの、見逃したりしないよ。やっぱりお父様も本当は私のワガママを通してやりたいって思ってくれたんだよね。うん、娘を大切にする父親は好感度高いよ？ 一応ダメ元で頼んでたから大丈夫。

無理と分かったからには覚悟を決めてお披露目会、参加させていただきますよ！

「お嬢様……」

「面倒だけど仕方ないわねー……私ももうすぐ学園に通う身。嫌だけど行くわ。すっごく嫌だけど！」

「それでこそお嬢様ですわ！ お支度はこの私にお任せください！ お肌をピッカピカに磨き上げますから！ 宝石もドレスも、旦那様なら一流の品を揃えてくれますわ！」

「ええ、そうねジェミー……」

うん、大丈夫よね。私が「婚約者にして！」とワガママを言わなければ、婚約者にはならない、なるはずはない、よね？

それから順調に準備は進み、イベント当日になった。

小説通りの、白に近いクリーム色に、フリルが下品にならない程度に大胆に使われたドレス。サイドの髪を後ろでまとめ、内巻きに下ろしたハーファアップのヘアスタイル。かなり値の張るであろう大小の宝石を大胆に使った首飾りに、十四歳らしく薄化粧をしてもらっている。

……へえ、小説では文字ばかりで描写はなかったから想像でしか分らなかったけど、実際に小説通りの姿になると、想像以上の出来映えに少し感動した。お人形さんみたいキラキラしたエフェクトがかかっているようで可愛い。これが今の自分なんだと思うとナルシストになりそう。それくらいのレベルだよこれ。とにかく可愛い。

ちなみに妹は今十一歳。なのでお留守番だ。

私のおめかしした姿を見たお父様（十歳のあたりからパパ↓お父様に変更）とノア兄様（名前＋兄呼びは本人希望……）は無表情でウンウン頷いていた。若干「元緩んです。お母様はおつとりとした口調で」似合ってるわあ。さすが我が娘ねえ」と言って微笑み、妹のリア（これは私が略した愛称）は頬を赤く染めて「お、お似合いです、お姉様……」とか細い声で褒めてくれた。

「それでは、行つてまいりますわ。行きますわよジェミー」

「はいお嬢様」

「ミヤちゃんをよろしくねジェミー」

「お任せください奥様。お嬢様の傍を決して離れません」

そしてこちらも着飾ったジェミーと一緒に馬車に乗り、城へと向かった。

「ごきげんようミヤルカーナ様」

「あら、ご機嫌麗しゅう皆様。素敵な夜ですわね」

馬車から降りて少し歩いたところに、縁あつて仲良くなった令嬢二人が立っていた。

どうやら私を待っていたようだ。

「元を扇で隠し、目を細めながら友人のほうへと歩み寄った。

……そう、もちろん仲良くなった令嬢とは、小説に出てくる悪役令嬢のお仲間さんたちだ。

まあ、ボッチが寂しかったので、私から声をかけて、我が家にお茶会と称して集まってもらったのだ。彼女たちも最初は遠慮がちだったが、何度かお茶会に招待して、次第に打ち解けて普通の友人のような関係を築いた。うん、私頑張ったわ！

お仲間その一、ミーティア・ラッテ（十四）。

侯爵家の次女。黄緑色の長髪に前髪だけウェーブのかかった髪。濃い緑色のおつとりとした垂れた瞳を持ち、淑やかで物静かな令嬢。読書が好きで、物知りな一面がある。

お仲間その二、フルシャン・カブーン（十四）。

侯爵家の長女。赤髪をいつもポニーテールにしている。吊り目がちな茶色の瞳を持ち、気が強く少し思い込みが強いが芯の通ったしっかりした性格。可愛いものが好きだが、周りには内緒にしている（バレているが皆気づかないフリをしている）。

小説で二人の好きなもの、よく出現するところを知っているので、ズルいかもしれな

いが話を合わせて少しずつ手懐……コホン。普通に仲良しになった。

でも、小説では二人と出会うのはもつと後、しかもフルシヤンとは嫌われスタートだったんだけど……大丈夫かしら……？

不安はさておき、三人で仲良く会場に入った。

まあ……当たり前と言ったら当たり前だけど、注目の的になってるよね。

飛ぶ鳥を落とす勢いと今話題のドルドムガン家の長女ミヤルカーナ、財力は公爵家に劣らないといわれるラッテ家の次女ミーティア、さまざまな事業を起こし波瀾万丈なカブーン家の長女フルシヤン。

そんな話題の貴族令嬢たちが、しかも仲良くお話ししながら登場すれば注目を浴びるのは当然なのだ。さらに見た目も「将来美人になるのは間違いないし！」ってくらい可愛いからね！もちろん、可愛いに私も入ってますよ！でも決してナルシストではないからね。うちの家族の顔面偏差値が高いのが悪いのよ。

会場で配られた飲み物をもらい、三人で談笑していると広間の奥にある重い扉が開き、さらびやかに着飾った三人の人物が現れた。

「待たせたな」

一言、声がかかる。その重厚な声が会場全体を包み、静寂が訪れた。

国王陛下。確か小説では四十六歳だったから今は四十二歳かな？金髪金瞳で髭を生やしている。威圧感はあるが、傲慢さは一切なく民に慕われている、この国の頂点に君臨するお方だ。

そして陛下の隣には王妃。えっと今は三十九歳ね。うわぁ〜物凄く若く見える。黒のサラサラストレートの髪に茶色い瞳。髪や瞳の色だけならまるで日本人のようだが、顔の造りがまったく違う。そして言わずもがな、美人です。来年には四十だというのに、ぶっちゃけ三十歳と言われても信じてしまうほど肌ツヤがいい。微笑むとエクボができて愛嬌がある。淑やかで、けど存在感があり、この国の女性の憧れの存在ね。

そしてその後ろから登場してきたのが王太子殿下。見事に父母双方を受け継いだ黒髪金瞳をしていた。まだ成長途中の青年らしさはあるが、無表情でも品があり、彼が纏っている空気は陛下に似て威圧感がある。

殿下は堂々と陛下と王妃の後に続き、席に着いた。

ほぁ〜……やはり物語のヒーローは美形だよな！小説通り、黒髪は少し青味がかっていて、顔の彫りが深く、そして整っている。誰が見てもイケメンだ。

……それにしても彼の金色の瞳、凄く綺麗ねえ〜。なんか見えて飽きない。宝石のよ

うな輝きがあつて、吸い寄せられる感じがして目が離せない……

陛下が挨拶をしていたが内容はまったく頭に入らず、ずっと殿下の瞳をじいーと見ていた。

あれ、目が合ってる？ ……なんか殿下も私のほうを見てる気がするの？ 気のせい……？

「――ま。……お嬢様！」

「っ！ ……あ、どうしたのジェミー？」

「どうしたのではありませんよお嬢様！ 陛下にご挨拶に行きましよう！」

殿下の瞳に夢中になっていて、どうやら周囲が動き出していたのに気づかなかったようだ。

本来、陛下への挨拶は誰が先に行っても構わない。だが、暗黙のルールで身分の高い順に挨拶していかなければならない。

いつの間にか私以外の公爵令嬢はすでに陛下の元に並んでるみたいで、私も急いで陛下の元へ行く。

私の番になったので、挨拶と、軽く世間話をして一礼して場を離れる。

……ふう危なかった。ちょうど二人目の公爵令嬢の挨拶が終わってのタイミングだっ

たので、無事挨拶ができた。と、思いたい。

お顔を合わせた瞬間、王妃様の眉が下がったのは、私がぼうっとしてたのが見えたのだろう。

陛下の前を辞する時、手招きされ耳打ちで「そんなにガブリエルの顔が良かったかしら？」と言われて思わず動揺してしまった。多分、顔は赤くなつてなかったと思うが、目を見開いてしまったのでバレてしまっただろう。……私、そんなにガン見してたのかしら？ なんか悪戯がバレた時みたいな感じで、少し気分が落ちた。

「ミヤルカーナ様、どうかなさいましたか？」

「あらミーティア様。ここにいるということは、陛下へのご挨拶はお済みですね」

挨拶が終わり、適当な食べ物を小皿に載せ、空いているテーブルへと行きジェミーと食べていると、ミーティアが話しかけてきた。ミーティアは飲み物を片手に、空いている席へと座った。

「先程いたしましたわ。それよりミヤルカーナ様、何かご気分が優れないのですか？ なんだか浮かない顔をしてられますが……」

「あ、ええ……王妃様にお小言をちやうだいしてしまつて……」

「まあ、王妃様に？」

先程の話をミーティアに話した。殿下の瞳が綺麗でずっと見ていたら陛下にご挨拶するのを忘れて、急いで挨拶に向かったところ、王妃様に殿下を見ていたことを指摘されたと……するとミーティアは何故か目をキラキラさせて私を見てきた。え、なに？

「まあ……！ ではミヤルカーナ様は殿下に気がおありで？」

「は？」

「ですから、殿下の瞳に見とれるほど見ていたのでしょうか？ ミヤルカーナ様は殿下に一目惚れなさったのではないのですか？」

「……いいえ？」

「え？」

「え？」

何を勘違いしているのかしらミーティアは。たとえ容姿が優れていようが、身分が高かろうが、私にはなんの魅力も感じないわ。むしろ、未来の破滅フラグをへし折るため、殿下に近寄りたくないのだけだ。

というか、何故か傍に控えているジェミーからも疑問の声が聞こえたんですけれど？

「何故そこでジェミーまで驚くの？ 私は殿下の金の瞳が綺麗で見ていただけで、殿下には興味ございませんわよ？ 寶石のようにキラキラしていたので見ていたまでですわ。

決して一目惚れではないわ」

「私、てっきりお嬢様が殿下に一目惚れしたのかと思って……はあ、やつとお嬢様に初恋が訪れたのかと期待をしましたのに……残念です……」

「ジェミー！ なんなのその口のきき方はっ！」

「ふふふ。ミヤルカーナ様は噂通り侍女と仲がよろしいんですね。なんとも羨ましい……」
「ミーティア様……？」

何故かミーティアに微笑まれた。まあ世の中、貴族が侍女と仲良くしてゐることは滅多にないのよね。つてか、私とジェミーは仲良くはないと思うんだけど。ジェミーが私に馴れ馴れしすぎてかなりキツク文句言ってるんだけど……聞き流されてるのよね。私が父に「あの侍女クビにして！」つて言ったら速攻ジェミー職なしになるのよ？ 大丈夫なのかしらあの子……

「いえ、なんでもありませんわ。それで、ミヤルカーナ様は殿下のことは本当になんとも思っていないのですか？」

「ええ。瞳以外には興味ありませんわ。まあお顔が整っているとは思いますが……『美水のマリオネット』と影で言われているくらいですから。お顔が整ってなければ『美』なんてつきませんわ」

「私も聞いたことがありますわ。でも美氷はまだしもマリオネットは……少し酷いたとえに思いますわ……」

「ええ。私もそう思いますわ。ですがご本人は叱責するどころか放置しておられますから。周りにはどうしようもありませんわ」

一応、本人も自分が陰でなんて呼ばれてるか知ってるだろうに、自覚あるのか何も言わないのよね。

確か番外編の一つに殿下目線の話があったなあ。ヒロインと出会う前は世界がモノクロに見えて、刻々とただ時間が過ぎていく、みたいなダークな感じの内容だった気がする。

私はこの小説のストーリーが好きで読んで、それぞれのキャラの過去？ みたいな話には興味がなく、すっ飛ばしてたから細かい内容とか覚えてないのよね……この世界に転生することが分かってたらすべて読んで頭に叩き込んでいたのにつ！ 前世の私カムバック！ やり直しを所望する！

でも最後の、私を断罪した後、ヒロインと結ばれるシーンは良かった！ あれ私見れないよねえ……この目で、間近で見たいんだけどなあ……無理だろうなあ。私がヒロイン苛めて断罪されなきゃ多分その通りにはならないだろうし。

小説の内容を振り返っていると、軽やかな音楽が流れてきた。ここにいる皆が陛下に挨拶し終えたのだろう。次は殿下とダンスの時間だ。

ミーティアはフルシヤンに声をかけに行き、私はジェミーと二人で会場の壁際に立ちドリントクを飲んでいる。ゆっくりと周りを見てみる。令嬢同士で話している人もいれば、曲に合わせて父娘で踊っている人もちらほらいる。

まだダンスホールに殿下の姿は見えない。今は招待された者たちが自分の席にいる殿下に自分を見せつける時間。殿下の目に留まれば誘ってもらえるかもしれないと懸命にアピールする場面なのだ。もちろん、踊っているのはダンスの腕や、自分の美しさを見せつけるため。

そして私は少しでも目立たぬよう、壁の花と化してしのぐつもりだ。

「ねえジェミー……踊らなければダメかしら？」

「まあお嬢様！ この時のためにダンスを練習してたんじゃないんですか!? 公爵令嬢なんですから踊らなければダメです！ 旦那様がご不在なのはとても残念ですが、私が相手役をいたしますわ！」

「はあ……」

「お嬢様。多分お嬢様は忘れていると思うのですが、三大公爵家の令嬢は自動的に殿下の婚約者候補のトップにいらっしゃるんですからね！」

「……は？ ……あ、そうだったわね。はあ」

「いつものお嬢様らしくありませんね？ 本当に体調が優れないんですか？ いつものお嬢様なら積極的に行動するはずなのに……」

そうだったそーだった。身分が一番高い令嬢から自動的に婚約者候補の上位に挙がるんだった。小説でも、私が断罪され退場した後、他の公爵令嬢二人が我先にと妃候補に名乗りを挙げたんだったわ。でもこれまでワガママ一つ言わなかった殿下が申し出をすべてはね除け、国王陛下にヒロインとの婚約を切に願ひ出たんだった。

……あ、じゃあ私が黙っていれば他の公爵令嬢が名乗りを挙げるかも……？ そしたら他の令嬢が婚約者になって……

そしたら私、結婚しなくても済むかも……？

……ふ、ふふふ。

殿下と婚約しない未来を想像していると、ジェミーが口角をひくつかせて話しかけてきた。

「お、お嬢様……？」

「なあにジェミー？ そんな面白い顔してどうしたの？」

「な、なんかお嬢様が何か企んで……い、いえ、なんでもございませぬ」

何よジェミーのくせに。言いたいことがあれば言えば良いのに……

まあさつきからニヤケ顔が止まらないのは自覚してるけど、そこまで顔をひくつかせなくてもいいじゃない！ 扇で口元を隠して平常心を取り戻さなきゃね。

ふう〜だいぶ落ちて……ん？ なんだかザワザワと騒がしいわね。

「ミヤルカーナ・ドルドムガン嬢。私と踊ってもらえますか？」

「……え？」

な、何故こうなった？

気づいたら私の周りには誰もいなくなっていた。

そして、ガブリエル殿下が目の前について。

右手を差し出されていた。

殿下とのダンスも、暗黙のルールで身分が高い令嬢から踊ることと決まっている。きつと最初は公爵令嬢二人のどちらかが殿下と踊るんだらうなと思っていたのに。

でも、これは予想外です。

殿下自ら私の目の前に来てダンスに誘うなんて……誰が想像できただろうか。確か小説では、私は陛下の隣で待機してて、ダンスの音楽が流れたとたん、他の令嬢を押し退けた。そして殿下はたまたま前にいた私を誘ってダンスを踊ったのだ。

それが何故こうなった？ 私は壁際でジェミーと話していたのに！ 自ら！ 殿下が私のところに来てダンスを申し込んできたんですけどっ！

しばらく放心していたが、すぐに我に返り、ニコリと微笑み「光栄です」と一言添え、ジェミーに肩とグラスを渡した。そして殿下の手を取り、ダンスホールの中心へと足を運んだ。

あ、足が震える……心臓バクバク言ってる……多分、手汗が酷いと思う（手袋してるけど）。

この会場に来るだけでも心の準備に一週間もかかったのに、今度は殿下とダンスを踊るといふ心の準備が必要になってしまった。

ああ、はじめから踊ることを想定して心構えしていれば……こうも予想外のこと起こってしまうとパニックになってしまう。

……いや、公爵令嬢の身。動揺はひた隠しますよ？ 体は十四歳だが精神年齢はブラ

ス二十？ 年を重ねてるんだから鉄の仮面をつけて平静を装いますよ？ ……緊張？

ナニソレオイシイノ？ 女は度胸よ！

とにかく深呼吸。頑張れ自分。足の震えを止め、互いに一礼して、ゆっくりと殿下に寄り添ってダンスを踊り始めた。

スローテンポのゆっくりとした音楽に合わせて踊ります。……踊れてるかな？

……互いに終始無言。居たたまれない。

何これ？ いやこれは拷問に近い。え、嫌がらせですか？

え、この状況、私から話しかけなきゃダメなパターン？ 私、男性との話題なんてそんなホイホイ思いつきませんが？

お父様やノア兄様ならボンボン話題が出るが、相手はこの国の王太子。次期国王であらせられるガブリエル殿下になんの話題を振れって言うの？ ハードル高くて私には無理です。誰か助けて！

……あ、曲が終わった。な、長かった……やっこの苦痛から解放される！

さあさあ早くジェミーの元へ行きさっさと帰りましょう！

もういいでしょ！ 役目は果たしたし、帰ってもいいよね！

殿下の肩に置いていた手を離し礼をしようとしたり……

な、何故か腰に添えられている手が、腕が、離れないのですが……？

そのまま新たな曲が流れ、殿下は無言で踊り始める。手を引かれ体が傾きかけたので、慌てて肩に手を添えてダンスについていく。

……あれ？ これって……

「あ、あの……殿下？」

「なんだ」

「先程一曲踊り終えたと思うのですが……」

「それがどうした」

「えっ！ あ、あの、その……何故今またこうして私と踊っているのでしょうか？」

あたりが騒がしい。

そりゃそうだ。同じ人と二曲続けて踊るということは特別な相手、今の状況だと……

殿下の婚約者候補という意味合いがあるのだ。

それに気づき、血の気がサーッと引き脚に力が入らなくなる。ついには足がもつれてしまった。だがよろけた私を殿下が軽やかに支えてくれた。周りからは普通にダンスを踊っているように見えるだろう。私の失態を殿下がフォローしてくれ、笑いのものになら

ずに済んだのだ。

こ、これはまずい流れに……一体何が原因でこうなった？ これがシナリオの強制力というもののなの？ 私が殿下を避けようとしたから……？

「な、何故私と二曲も踊りに……？ 意味、ご存知ですわよね？」

動揺を隠しきれず、思わず相手を睨みつけ、いつもの口調で相手を責めるように質問してしまっただがすぐに「あ、失言した」と気づき、口を噤み、俯いた。たかが貴族の令嬢が王太子殿下を偉そうに睨んで説教じみたこと言っちゃったのよ！ ……これ、不敬罪に値しないわよね？

……もちろん周りには聞こえない、でも相手にだけは聞こえるほどの音量で話していたけど……。殿下はそれまでと変わらないトーンで返事をしてくれた。

「意味は知っている。これは私の意思でやっていること」

「理解に苦しみます。私を選んだ理由をお聞きしても……？」

顔を上げ殿下の目を見る。怒ってないようで安心したわ。

それより……ああ、殿下の瞳、間近で見るとさらに魅力的に見えるわ。ほんと、殿下の瞳のような宝石があれば宝箱に入れて一生眺めていたいわ。

見つめ合っていると、殿下がゆっくりと一文字に閉ざしていた口を開いた。

「……その目だ」

「目……でしょうか？」

「国王陛下が挨拶している間、ずっと私を見ていただろう」
「っ!？」

あ、バレてた。そりゃそーだよ。バッチリ見つめ合ったものね……でもガン見してたのは私だけじゃない気もするんだけど？ 他の令嬢も、殿下の容姿に見とれて陛下の挨拶を聞き流してたと思うんですが？ 特に私を除いた公爵令嬢とか公爵令嬢とか公爵令嬢とかっ！

「そなただけ、私を見る目に、欲望や色情を読み取れなかった。……私はいつともさまたまな視線を浴びる。だから、周りとは違うそなたの視線に興味が湧いたのだ」

ええーっ！ つまり今のこの状況は私が原因だったのお!？」

ただ「瞳が綺麗だなあ」と見つめてたのが原因で、破滅フラグの第一旗が立ったっていうの!？」

え、嘘でしょ!？ 誰か嘘だと、夢だと言って!!

「……なんだ、乗り気ではないのか？」

「イエ、トテモ……はい、とても光栄に思います」

「……そうか。では——」

ちようど良いところで曲が終わった。私はすぐさま殿下から離れ一礼をする。何か殿下が話しかけてきた気がしたがあえて無視させてもらい、すぐにジェミーを捕まえて会場から出て、迎える馬車に乗り込んだ。

「ううう……」

「お嬢様! 一つの間にか殿下とお知り合いに!? っってお嬢様!? 大丈夫ですか？」

思わず馬車の床に突っ伏してしまった。床が汚くても今は構ってられないわ。

なんで殿下と踊ったりしちゃったのよ。

でもあの場で殿下からのお誘いを断れるはずないよね？

てか、二曲続けて踊ったの、陛下たち見てたよね？ ファーストダンスを殿下と、さらにセカンドも……うう、もう無理じゃね？

「じえみー……」

「それにしても王太子殿下、とても格好良かったですねー! あのお嬢様とダンスしてる時なんて絵に描いたようなお似合いの二人でしたよ! ほんとにっ殿下とお知り合いに? ダンスはどうでしたか? 殿下と密着してどうでしたか? もうお嬢様が殿下の婚約者に決まったも同然ですね!」

「……」

ジェミーは何故か興奮して私が床に突っ伏してるのにも構いなく夢を膨らませて質問攻めしてくる。待ってジェミー、私はまだ、まだ！ 殿下と婚約するとは決まってるのよ！

……でももう殿下との婚約、逃げられない？ だって国王陛下の目の前で踊ったのよ？ なんか外堀をコンクリートで埋められた感じがするのですが気のせいですか？

何これ、これがシナリオの強制力なの？ 強制力コワイ……キョーセーリョクオソロシイ……

家に帰ってからはもう身体的肉体的に力尽きて、ドレスを脱いで即ベッドに潜り、シクシク泣きながら眠りにつきました……

……そして次の日、王家の紋章のついたお手紙が届き、正式に王太子殿下の婚約者に決まってしまった。もちろん拒否権なし！

お父様はいつもの無表情な顔を崩し、複雑な表情を浮かべ、「何故私がいなくてころで……そもそもどうして私は昨日に限ってあんなに仕事の書類を押しつけられたのだ？」などと呟いており、お母様はおつとりと苦笑いして「どうでしょう？」と事の

重要性を理解してるのか微妙なことを言うばかり。ノア兄様は終始無言で、リアはどう反応すればいいか戸惑っていた。

一応、昨日はお父様も王宮にはいたが、仕事に駆り出され、お披露目会には顔を出せなかったようで……昨日のできごととはジェミーが大体まとめて話してくれたようだ。私も殿下と話した内容をお父様に伝えた。

「世の中、何が起るかわからないものだ……。まさか我が家が王族と関係を持つことになるとはな……」

「お、お父様！ まだ婚約の段階なわけで、結婚するとは――」

「あの殿下が自ら行動し、ミヤルカーナを婚約者にとおっしゃったのだぞ？ ……ほぼ確実だろう」

「そ、そんな……」

なんとも、希望を打ち砕くようなことを言ってくれましたね父よ……

このまま私が十八歳になれば断罪の道しかないというのに……

この、お先真っ暗な状況なんとかならないのかしら……

ああ、ヒロインが現れるまであと三年。

殿下とトコトン距離を置くか、または殿下が私を嫌うよう仕向けるか……